

本当に求められている 「国際人」とは何か

経営学部 高山晃郎

昨年、頻繁にテレビに出ている脳科学者の茂木健一郎氏の『人は死ぬから生きられる―脳科学者と禅僧の間答（新潮新書）』という本を見つけ購入しました（著者は、茂木氏と禅僧の南直哉氏）。この本の中で、著者の一人である茂木氏は青森県にある恐山へ行き、そこで考え、感じたことを、この本の中で述べています。私自身、信心深いところは持ち合わせていないのですが、この本の内容に興味を持ち、遂には、この本を購入して二週間後には、私も恐山を訪問してしまいました。そんなことから、今回の『名城大学経済・経営学会会報』には、私の恐山訪問の記録と、その当時、愛読していた内村鑑三の『代表的日本人』（岩波文庫）の文章を引用しつつ、現在、世間で一般的に言われている「国際人」についての私なりの考えを提示したいと思います。

ここで簡単に、私の「国際人」についての考えを述べておきます。現在、本当に世界で求められている「国際人」というのは、次のような人のことを言うのではないでしょうか。自分の生まれ育った国の歴史や文化を理解し、実際に伝統文化等に触

れ、その感じたことを、自分の中に深く落とし込んでいくかどうか。これが今、世界で真に必要とされている人ではないでしょうか。グローバル化が進展する世界で、このような人たちが集まり、議論することで、本当の意味で各国はお互いを理解し合い、多文化理解等も進むのではないかと考えます。

恐山へ出発

二〇〇九年六月八日、私は青森県むつ市にある恐山へ向かいました。恐山は、とにかく遠いところにあります。飛行機ですと青森空港か三沢空港を利用することになります。私は日本航空を利用し、青森空港に到着しました。ここから、恐山へ行くには、青森空港からＪＲ青森駅へ移動しなければなりません。青森空港からＪＲ青森駅ということで、交通の便は良いだろうと思っていたら、青森空港からＪＲ青森駅へのバスは一時間に一本程度しかありませんでした。タクシーを利用するとかなりの金額になるので、私は、青森空港のロビーでお茶を飲みながらバスを待つことにしました。その間、辺りを見回すと、すぐに、ホタテが名産品であることが分かりました。暫くして、ようやくバスに乗り込み、四〇分程度でＪＲ青森駅に到着しました。途中、バスの中から、本当に遠くまで来たな、と思いましたが。たまたま書店で購入した一冊の本との出会いから、本州最北端の青森県まで来てしまったのです。さて今度は、ＪＲ青森駅から、特急列車を利用して、ＪＲ野辺地駅へと向かいました。途中、浅虫温泉という、ちょっと降りてみたくなる駅もあ

りました。JR青森駅から三〇分程でJR野辺地駅に到着しました。ここで乗り換えをしなければなりません。恐山は本当に遠いのです。次は、青森県の下北半島をJR大湊線でひたすら走ります。列車は二両編成でした。下校途中の高校生も多く乗車していました。このJR大湊線の列車に乗っていて圧巻だったのは、下北半島を海岸線沿いに、一直線に走ることでした。とても景色が良く、今でも記憶に残っています。約一時間で目的地のJR下北駅に到着しました。JR下北駅に到着したころは、すでに午後五時を過ぎていました。本来であれば、恐山へは、ここからバスで移動できます。しかし夕方のこの時間では、もうバスはありませんでした。今回のこの旅では、恐山の宿坊で一泊するのですが、夕食の関係もあり、午後六時には到着しなければいけないことになっていました。もうバスはないので、JR下北駅からタクシーで恐山へと向かいました。私の乗ったタクシーは、途中から山の中へと入って行き、かなりの山道を進むと、「霊場恐山」という文字が右から書かれてある門を通過しました。この辺りから、携帯電話は使えないようです。それから一〇分程して、突如として視界が開け、左手に宇曽利山湖が広がりました。この湖の酸性度はとても高いそうです。こうして、ようやく目的地である恐山に到着しました。何度も書きますが、本当に恐山への道のりは遠いのです。早速、恐山の入り口にある受付に行き、宿坊の泊まりであることを伝え、遂に、二週間前にたまたま見つけた本に書いてあった恐山の中へ入りました。硫黄の匂いがとても強かったです。当然ですが、本では、匂いまでは伝わりません。実際にその場所に行く

ことで、感じるこのできるものが多いことを再認識しました。この恐山は日本三大霊場ですが、有名な温泉地でもあるのです。ここで一息入れましょう。その当時、読んでいた内村鑑三の『代表的日本人』の中で、私が印象に残っている文章を紹介しましょう。恐山訪問や、この『代表的日本人』を読む中で、日本のことを深く考えることの重要性を再認識しました。内村鑑三の『代表的日本人』という本について、簡単に紹介します。現在、世間では、グローバル化が進展していく中で、日本人はどのように対応していくべきか、といったことが、よく言われるようになっていきます。しかし、この『代表的日本人』という本では、すでに一九〇八年（明治四一年）に、このグローバル化への対応について書かれているのです。この本は、当初、英語で書かれたものですが、西欧文化が日本に押し寄せてくる中で、日本人はどのように生きるべきなのかを、五人の日本人を通じて、ヨーロッパに紹介したもののなのです。五人の日本人とは、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人です。私は、最初、岩波文庫で読んだのですが、さらに古本屋で『内村鑑三英文著作全集』まで購入し、英文も読みました。正直、英文は読みにくかったのですが、実際に西欧に紹介された原文を読むことは、重要なことだと思います。それでは先ず、中江藤樹が述べたとされる文章を紹介しましょう。やはり日々の生活の様々な出来事に対して、小さなことを大事にするという心構えが大切であるということでしょうか。私も高いレベルで、このことを意識していきたいと思います。

“All men hate bad names, and love good names. And as small deeds, unless accumulated, make not names, the small man takes no thought of them. But the *kunshi* despises not small deeds that come to him day by day. Great deeds he also does if they come in his way; only he seeks them not. Great deeds are few, and small deeds are many. The former make names; but the latter *virtue*. The world seeks great deeds, because name is what it loves. If done for the name's sake, however, even great deeds become small. A *kunshi* is he who makes virtue out of many small deeds. Indeed, no deed is greater than virtue. Virtue is the source of all great deeds.” (『内村鑑三英文著作全集』教文館 p. 96)

「人はだれでも悪名を嫌い、名声を好む。小善が積もらなければ名はあらわれないが、小人は小善のことを考えない。だが君子は、日々自分に訪れる小善をゆるがせにしない。大善も出会えば行う。ただ求めようとしないだけである。大善は少なく小善は多い。大善は名声をもたらずが小善は徳をもたらず。世の人は、名を好むために大善を求める。しかしながら名のためになされるならば、いかなる大善も小さくなる。君子は多くの小善から徳をもたらず。実に徳にまさる善事はない。徳はあらゆる大善の源である。」(内村鑑三著・鈴木範久訳「一九九五」『代表的日本人』岩波文庫・p. 122)

恐山の中の様子

宿坊の人から、「一般の方は、今日、あなた一人ですよ、」と言われました。宿坊に到着し受付を済ますと、恐山に来るきつかけとなった『人は死ぬから生きられる』脳科学者と禅僧の間答の著者の一人である恐山の院代(山主代理)の南直哉氏が、現れ、挨拶を交わしました。私よりもかなり長身の方でした。その後、宿坊の係の人に、宿泊する部屋を案内してもらいました。その際、恐山には小さな虫が多いため、窓は開けないように注意されました。泊まる部屋は、かなり立派でした。というのは、恐山では、毎年七月二〇―二四日に大祭典が開かれます。この時に多くの人が全国から恐山にやって来るので、宿坊の施設はとても充実しているのです。

夕食まで時間があったので、早速、恐山を探索しました。この恐山、天国と地獄の二つの世界が同居している場所、と世間では一般的に言われています。まさにその通りの場所でした。とても立派な山門があり、その山門の上方には青色の「霊場恐山」という看板がありました。山門の横には、本堂(供養の道場)があります。この夕方時間帯では中には入れず、外から眺めるだけでしたが、本堂の中には、多くの亡くなられた人の写真が所狭しに飾られてあり、その圧倒的な光景は、これまで見たことがなく、かなり衝撃的なものでした。山門を奥に進むと、本尊安置地藏殿(祈願祈祷の道場)があります。その道場を右手にして、ゆるやかな坂を登って行くと、煙が立っている場所があり、この辺りは無間地獄と言われています。そこに

は、様々なところに石が積まれており、しかも一つや二つの石の山ではなく、数え切れないほどの石の山がありました。暫く歩き、坂の上に到着すると、恐山を一望できます。この日は、私ひとりしかいなかったこともあり、景色以外のものではなく、その恐山の迫ってくるような景色を今でも忘れることができません。無間地獄を過ぎますと、今度は奇麗な湖が現れます。この湖は日本でも珍しく、山の中にあり、宇曽利山湖と呼ばれています。この湖のほとりには、浜辺のようなものがあり、極楽浜と言われています。先ほど歩いた無間地獄とは、対照的な風景で、非常に静かで落ち着いていました。その後、夕食を食へ、恐山の中にある温泉に入り、その日は、移動の疲れもあり、寝ることにしました。

次の日は、朝六時三〇分より、朝のお勤めが本尊安置地蔵殿であり、それを終えた後、昨日は入れなかつた本堂（供養の道場）に入れさせて頂き、ここでもお勤めをしました。とても短い時間でしたが、非常に充実した恐山訪問でした。帰りの旅程は、行きほどの時間の長さを感じませんでした。

さて、ここでまた、『代表的日本人』の文章を紹介しましょう。今度は、上杉鷹山です。私自身、柔道や古流柔術を修行していたこともあり、この上杉鷹山の生活姿勢はとても参考になります。この上杉鷹山の偉大なところは、自ら身に付けたことを糧に、物事の本質を的確に捉え、社会に大きく貢献しているところではないかと思えます。西欧の人たちは、このような内容を知り、どのように感じたのでしょうか。また現在に生きる私た

ちは、どのように上杉鷹山の姿勢を受け継ぐことができるのでしょうか。グローバル化が進展していく中で、日本の良き伝統を引き継ぎながら、世界に貢献していくことが必要なのだと思います。

“As despair took hold of me, as I witnessed with my own eyes my people's miseries, my attention was called to a little charcoal fire before me, that was on the point of going out. I slowly took it up, and by blowing at it gently and patiently, I succeeded in resuscitating it — to my very satisfaction. May I not be able in the same way to resuscitate the land and people that are under my care? This I said to myself, and hope revived within me.” (『内村鑑三英文著作全集』 教文館, p. 45)

「この目で、わが民の悲惨を目撃して絶望におそわれていたとき、目の前の小さな炭火が、今にも消えようとしているのに気づいた。大事にしてそれを取り上げ、そっと辛抱強く息を吹きかけると、実に嬉しいことには、よみがえらせることに成功した。同じ方法で、わが治める土地と民とをよみがえらせるのは不可能だろうか。そう思うと希望が湧き上がってきたのである」(内村鑑三著・鈴木範久訳「一九九五」『代表的日本人』岩波文庫、p. 59)

おわりに

この恐山、本当に余計なものが置いていないのです。それはある意味で、とても新鮮な光景であり、日頃の日常生活の中で見失ったものを取り戻せるような気がします。恐山を訪問してみても再認識したのですが、やはり、人間というものは頭の中だけで考えているだけでは、思考能力に限界があり、実際に自分をその場に置くことで、何かを得ることができないのではないのでしょうか。日本には、多くの貴重な場所があります。そのような場所に一度、足を運んでみるはどうでしょうか。何か新しい感覚や発想を身に付けることができるかもしれません。私は今度、日本一の山である富士山に登ってみたいと考えています。十分に事前準備をして、登りたいと思います。

さて「国際人」という用語を広辞苑で引いてみると、「広く世界的に活躍している人」とあります。このことは、多文化理解英語での情報発信等のことを指している、と世間一般では考えられていると思います。私は、国際人というのは、日本のことをどれだけ知っていて、そのことを自分自身でどの程度まで消化できているのか、このことが、極めて重要であると考えています。もちろん英語等も重要であることは間違いないのですが、グローバルな世界で活躍する上では、技術的なことよりもむしろ、バイタリティ溢れる人が、今、本当に求められているのではないのでしょうか。私はそのように考え、これからも、精進していきたいです。

今回、この『名城大学経済・経営学会会報』に寄稿させて頂

くにあたり、私自身が昔から持っている「国際人」についての考え、及び、そのことをいかに実践するかということについて、書かせて頂きました。ただあくまでも私の個人的な考えなので、様々な意見があると思います。それとこの会報では、『代表的日本人』の文章を引用してきました。私は、明治時代に、日本人はどのように生きるべきなのかということを、西欧に紹介していたという事実に驚きました。『代表的日本人』の中にあるように、日本人の伝統的な考え、というものを再認識し、それを日常生活の中で、いかに実践するか、ということが大事なのではないのでしょうか。そのような訓練を積むことにより、本来の意味でのグローバルな人材を日本から輩出することが可能なのではないのでしょうか。ありがとうございます。

最後に『代表的日本人』の二宮尊徳が述べたとされる文章を紹介し、結びとしましょう。

“Think not you can get anything else than cucumber-fruit when you plant cucumber. The thing a man planteth, the same he must reap also.” (『内村鑑三英文著作全集』教文館、pp. 79-80)

「キュウリを植えればキュウリとは別のものが収穫できると思ふな。人は植えたものを収穫するのである」(内村鑑三著、鈴木範久訳「一九九五」『代表的日本人』岩波文庫、p. 100)

"Sincerity alone can turn misery into happiness: arts and policies avail nothing." (『内村鑑三英文著作全集』教文館, p. 80)

「誠実にして、はじめて禍を福に変えることができる。術策は役に立たない」(内村鑑三著・鈴木範久訳「一九九五」『代表的日本人』岩波文庫, p. 100)

以上